

雪風と狩人様

備忘録

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何の因果かヤーナムに迷い込み狩人となったサイトは例の如くルイズに召喚を受ける。

しかしゲールマンを倒し助言者にされてしまった狩人様もついてきた。

ハルキゲニアに狩人様。何も起らないはずがなく……

徐々に外宇宙色に染まるハルキゲニアの明日はどっちだ。

目次

召喚その1	1
召喚その2	4
ヤーナムの狩人とハルキゲニアの小さな	
狩人	9
狩人と古い大きな物語	18
狩人様と盗賊	25
狩人とガリアの姫君1	33
狩人とガリアの姫君2	39
狩人と小さな狩人	44
子爵に啓蒙を	51
子爵は狩りを知る	59
始まった時にはだいたいですでに手遅れ	

ヤーナムの血を受け入れるってそういう	
こと	70
狩人様はヤーナム野郎だから	75
悪夢は巡り、そして終わらないものだろ	
う?	79

召喚その1

ああ、うとうととしていた。人形ちゃん、私はどれほど寝ていたのかね？

ほう、半日ほど。ならばあのバカ弟子のお使いもそろそろ終わる。

はてさて、また長い夜を過ごすか、それとも夜から解放されるか、人類の幼年期を終わらせるか。

「狩人様の、よろしいように。それがどのような選択であれ私はあなたに付き従います。それが私の作られた意味ですから」

まあ、選択はあいつに任せよ。それが助言者というものだろうか？

まあ前任者や女王の言っていた長い夜にも飽きた、という言葉が身にしみて解つてきた頃さ。

人形ちゃんを置いていってしまうのが残念だが・・・まあ、あいつは私のような「ひとでなし」ではない。私の側よりよほど暖かいだろう。

「いいえ、あなたの暖かさはあなたの意思、そして継いだ古い遺志のものです。あの方とはまた別だと思えます」

私が継いだのはあの炎使いの女王の遺志、それは最初の火の残り滓だろうからね。そ

りやあ暖かいだろうさ。

「すみません、狩人様。お気に障ったでしょうか……」

いいんだ。さて、今回の夜明けも近いな。あと数時間か……

3つの選択肢のどれをするやら。といつても、だいたい一択だがね。

だが、おや……？ほうほう、どうやら四択になったようだ。

「これは、鏡でしょうか……どこかで見た気がします」

ああ、ミコラーシユのバカの使ってた奴に鐘を合わせたようなものさ。

次元をまたぎ、隔てた場所をつなぐ。これはそういうものだ。

「何か、声のようなものが聞こえますね」

ああ、私には聞こえるし、見える。脳に瞳があるからね。

……運命（さだめ）に従いし従僕と来たか。

ふーん？そういう割には君は隣に立つ伴侶を求めているように思うがね。

なに？使い魔とは一心同体のようなもの？はん、そりや自らの体のように動く道具と

何が違うのかね？

ああ、まあいいさ。そんなに悲しむな。我々は元より呼ばれば応じるものだから

ね。

だが私では君の従僕にはなれない。助言者だし、すでに一人と一柱に使えている身

だ。

四本目の三本、なんて冗談にもならない。

そうさね、私では無理だ。だが、君の要望に叶いそうな者はいる。

ああ、君は正しく幸運だ。まさに君が望む一心同体に従う従僕であり、私が見た隣に立つ伴侶たれる者だろう。

案ずることはない、ちゃんと強いさ。そんなよそこらの聖剣なんぞかすむ位にはね。そして何より奴は君を受け入れるだろう。きつとそうだとも。

君の弱さも素直な本音も奴は正面から受け止めてちゃんと答えを返すだろう。

君がそれを望むかどうかは知らないがね。だが、君もきつとそれを望むだろう。

そうだろう？ 尊い血を引き、みじめに아가き、そして血と同じように古い遺志を継ぐ運命の者よ。

今は何もわからないだろうが、心配することはない。どうせ運命の方が君を見つける。

それはそういうものなのだよ……直に慣れる。

さて、またせてしまったな。そろそろ彼が来る頃だ。

君の求めに応ずるかは彼次第だが……なあに、きつと奴は君を選ぶとも。見えているのさ……目があからね。

召喚その2

来たか、少年。いや狩人よ。

さてどうするね？私は前任者のように持つて回った言い回しは苦手なのでざっくり行こう。

少々痛い夜から解放され、夜明けに目覚めるか？

それとも私に挑み、私の椅子を奪うか？

そして、私を倒し、神をも超えてみせるか？

さあ、どうする？

ほう………？三本目の三本？これをくれてやると？自分はさつさと目覚めるから因縁は自分で蹴りをつけろ、か………

ああ、久々に爽快な気分だ。ふふふ、それも有りだろう。とうとう五択か。

そうさ、実は私の方からも、もう一つの選択肢を用意しておいた。

まあ見たまえ。どうだ？君好みの子だろう。君はいろいろ小さめが好きらしいからな。

ああ、わかってたさ。女性は胸への視線に敏感なものだ。気をつけたまえよ。

ははは、そうへこむな。私を救いたいならば、まずこの子を救ってやることだ。

ああ、この子もまた古い血を継ぐ定めの子なのさ。

さあ、どうする？ なあに向こうはこちらに比べれば平和なものさ。血も獣も夜もずつと少ない。

どうだね？ ピクニックがてら行ってみては。なあに、どうせ一夜の夢にも、永遠の夜にもできるのだ。

時間の軛のなんとくだらないものか。だから向こうとこつちの時間は気にするな。私がどうとでもする。

どんなに長くとも一夜。夢とはそういうものだろう？

ははは、そうスネるな。決意が無駄になって気が抜けた？ なあに無駄じゃないとも。

ああ、無駄じゃないさね。

ああ、行ってこい。いつか来る夜明けのために。良い狩りを若き狩人よ。

■ 行ったか・・・おや、まだかすかにだがつながっているな。

ふむ、君は君で面白いな。君もまた狩人の業を継ぐ者、か・・・ならば助言者として放っておけないな。

君は二本目、といったところだろう？一本目の闇の映し鏡。火を求める灰……
ああ、雪か。そうだな。

どうせ三本目はどこまでも昼間にいる者だ。光り輝く方の映し鏡。

呪いの首飾りは腐り落ち、始まりの炎を手に入れて災いからどこまでも遠くある者。
雪も深淵もそばにありながら触れられない。だが暖めることはできる。

だからこそ君も彼女のそばにいないのかね？

ふむ、自分はずでに使い魔を手に入れている？三股はよくないと云ったのはあなた自身？

そうだな、そのとおりだとも。ならば私の主に聞かねばなるまいよ。直視するなよ？
狂い死ぬぞ。

どうです？青き血、月の御方。あの暖かな地などいい保養所では？

火が消え、夜になったこちらよりは暖かいでしょう。人も血も。

ふふふ、そうでしょう。そうでしょうとも。反逆の従僕など側にいて欲しくありません
まい。

ここは一つ互いに距離を取るのも一手かと。

そら、主の許可は出たぞ？どうするね？

ああ、迷うならばこれも言ってしまうか。君の竜は君のものだ。君を乗せ、どこま

でも駆けることができるだろう。

だが、どこに？とらわれの母を救い出して、それでどこに行く？狂王を倒して、ではその後は？

そうさ、君には何も残らない。たとえ正氣に戻ったとしても老いた母とくたびれた従僕だけだ。

あとはせいぜい君を暖める火たる友人？それで十分？ふーん、本当に君はそれでいいのかね？

そうだな、仮に君をそこから救い出す勇者……ああ、竜狩りのイーヴアルディなんてどうだ。

まあそういうのがいたとしてだ。君は二本目だ。すでに勇者には姫君がいる。

君は彼の冒険譚でたまたま助けられた聖女の一人でしかない。勇者はいつか姫君の元に帰る。

それはあまりに不公平じゃないか。だから魔女がドレスをしつらえてやろうというのさ。

信じない？そうかね？なるほど確かに、君は正しく、そして幸運だ。

君の求める正氣を取り戻す靈薬。まさにヤーナムの血の医療だけが可能とするものだ。

そうだ、そうだと。私はすでにそれを持っている。

病など契約料として治してやろう。

だが、縁なき者に渡す法もない。だから君、まずはヤーナムの血を受け入れ給えよ………

くくく、ははは！そうだ、そうするだろうとも！

皆そうするのだ。火に焼かれる羽虫のように神の血に焦がれるのさ！皆そうして堕ちるのだ。

君も、私もだ！

なあにそう悲嘆するな。畏れるな。

ぶつちやけ君には助言者も力も必要だろうか？先達として少し世話を焼きたくなったのさ。

私もそうされてここまでなったのだ。後輩にもそれを分け与えるべきだろうか？

それに、私は人形が大好きなのさ！

ああ、そういう事で少し遊んでくれるから人形ちゃん。

お留守番任せたよ。君ならできるだろう？なあに、すぐにまた帰ってくるさ。

「行つてらっしゃい、狩人様。あなたの目覚めが有意なものでありますように」

ああ、行つてくるよ。フローラの母、その遺志を継ぐ人形よ。

ヤーナムの狩人とハルキゲニアの小さな狩人

こんにちわ、乙女よ。

「あなたは……何？」

何、か……ただ狩人と呼んでくれ。わかりにくいならば「カインの」とか「月の香りの」とか近しい者は呼ぶよ。

そうさな、ここでの言い方をするならパルファン・ド・リユンヌ・ラ・シヤスイーズ・ド・カインハーストになるのかな？

「……貴族？」

まあね、没落貴族で本家を頼りに都会に行ったらなんと本家は本家でお取りつぶしにあつてね。

女当主と召使いが十人そこら。でつかいお城にそれだけだ。泣けてくるね、実際。

まあ、そんなわけでそのの騎士として働いていた事もある。だが今はただの狩人の助言者に過ぎないさ。

「そういうことを聞いてるんじゃない。あなたは知らないはずのことを言った。

そしてあの黒髪の狩人の師匠だとも。只者じゃない。一体、何？」

貴族なら魔法くらい使えるんだろう？ここでは。まあ、私の国でも似たようなものはあるのさ。

だからいろいろ見える。知りたいことも知りたくもないこともね。

ただ狩りの中で折れずに屍を積み上げ続けただけだよ。だから戦い方なら教授できる。

ああ、薬かね？魔法を使い、没落したとはいえ貴族ならそのくらいは宝箱の奥にしまつてあるものさ。

「……信用できない」

何が？教師が帰った後に君にだけ囁いたこと？戦いの腕前？薬の効果？

「あなたは多分強い。そうしていてまるで隙がない。でも、うさんくさい」

ははは！これは私の故郷では皆こんなものさ。陰気な土地なんだよ。お国柄と思いたまえ。

そうさね、売り込みといこうか。手っ取り早く行こう。かかってきなさい。

「手加減できない」

そうかね、まあ私は頑丈だから気にするな。思い切りやりたまえ。

君も国は違えど狩人に師事したのだろう？こちらの狩人の力、みせてくれよ。

「ただというわけにはいかない。私に何も利益がない戦いはしたくない」

ふむ、やる気が出ないかね？ああ、では君が勝ったら薬をやろう。私自身でその薬を試してもいい。あるいは、こんなのはどうかね？

ただの金貨だ。つついっつい百枚ほどため込んでしまつてね。引退した身で田舎にいて使道がない。勝つたらくれてやろう。どうかね？

「つまりこれは賭け。それならやつてもいい」

やる気が出たかね？ああ、その竜も使うと良い。

私はそうだな．．．．．ああ、これでいいか。何も持たないとそれはそれで気を遣うだろう君？

「それは．．．．．木の棒？」

ああ、本来はこの先に刃をつけて大鎌として戦う。弟子と訓練するときを考え出した鍛錬用の使い方だ。

私の元々の武器は3つ。鉈と戦斧（ハルバード）と杖だ。

なので今回は私のもつとも得意かつ狩人の基本と言える戦斧の振り方で行くよ。

「とても長い。背の高いあなたの背丈と同じくらいある」

そうだよ？我が故郷で戦斧といえはこの長さだ。怖じ気づいたかね？

ああ、怪我を厭うならば互いに一撃、もしくは相手の体に武器か手か魔法が触れたら勝ちでも良い。

君に参加料はいただかないし、何度挑んでも良い。さあどうする。

「やる。お互い怪我がないなら問題ない。それに、断ったらあなたはしつこそう」

そりゃあ、狩りの中では折れないのが狩人というものさ。

さ、来たまえ。ヤーナムの狩りを知るが良い。

「ウインデイ・アイシクル」

ふむ、モーションが長すぎる。パライ取り放題だぞ。

だが直進する氷の弾丸か。連射もそれなりに効くようだ。

ガドリリング的な運用ができそうだな・・・

はい、君に触れた。詠唱はもう少し距離を取ってやりたまえ。どうしても隙が出るだろうからな。

「何をされたのかまったくわからなかった・・・」

何って、ただ歩いて走って転がり回って、君の横を通り抜けて背後から触れた。それだけだよ。

「もう一戦」

いいよ。好きな距離、好きなタイミングでやりたまえ。

君が攻撃してきたら私も動く。

「ラナ・デル・ウインデ」

風の一撃か。だからタイミングがわかりやすいよ。小手調べはやめにしたくないか？見に徹するのは良い。

だがやるならばもう少し逃れようがないくらい激しく追撃するか、完全に逃げに徹するべきだ。

「ラグーンズ・ウォータール・デル・ウインデ」

ふむ、迎撃として全方位の竜巻を選んだか。悪くないな。そういうのは良い。

ローゲリウスを思い出すな。あれも良い狩りだった。本気を引き出すまで本当に面倒だった。

だからよく知ってるんだよ。それは長く続くものじゃないし、そういうのはだいたい術者の精神的な視界をさえぎる。

要は棒立ちにならざるを得ないのさ。だからこうして回り込まれて後ろから足を引っかけられたりするんだ。

はい、次行こうか。

「……あなたは見に徹するのは良いと言った。そして売り込みがしたいとも。

なら、あなたの攻め方をみせて。何ならルールや武器を変えてもいい」

ほう、いいね。多分後三回くらいで私が飽きると思ったんだ。

そうさね、私の素手の攻めを一分避けたまえよ。それで駄目なら三手避けたまえ。

もちろん、君が私に一撃入れても勝ち。

それ以上はおそらく無駄だ。他の売り込みを考えるさ。それこそ私の魔法なり技なりを演舞するとかね。

「あと二回……わかった。たしかにそれでも駄目なら無駄」

合理的だね、良いことだ。だがそれだけでは勝てんよ。

では一分ルールからだ。少し待ちたまえ。

「その格好は……?」

ああこれかね。激しい攻め方が得意な先輩狩人がいたのさ。その物まねだ。形から入ろうと思つてね。

たまらぬ血で誘うものだ。えづくじゃあないか……つてね。

さ、行こうか。

「速い!」

おつ、飛んで逃げるかね?なるほどこのルールならばすごくとても有効だ。

だが残念。ガスコインといえは奴のロケットキックはもつとも注意すべきものなんだよ。

まあ、人の形を残した身では少々高く飛べるジャンプパンチに過ぎんかね。

だが古狩人とは基本的に飛ぶものと思いたまえ。

「次で、最後……」

ああ、そうだね。ならこれで行こうか。

「また服が変わった……」

これは大鎌の柄として使う棒なんだが、さつきまでは戦斧として振っていた。だが、刃こそないが本来の使い方、かつての持ち主のやり方で振るおう。

先ほどまでとは次元の違う速さと間合いと思いたまえ。三回連続で進みながら振る。その後一〇秒の猶予をもうけよう。全力で避けたまえ。

「解った」

一手。

「やつぱり、とんでもなく速い……！でも、見えてきた」

二手。

「全力で、相手を見ながら、下がる……！」

三手。

「横に回り込んで、薙ぐ！」

ほう、やるじゃないか……だがそれでこそだ。

帽子を飛ばされるとはね。君が初めてなんじゃないか。これは。

すばらしい。称えよう。さあこの薬と金貨は君のものだ。

「危なかった……！だけど、これがきつと正解。あなたはずっと距離を測りながら側面に回り込んでいた。」

「ステップの速さこそ異常だけど、歩幅自体は誰でも跳べるくらいの距離しか出してない。」

「ならそれがヒント。見て真似してみろと言うこと」

「賞賛しよう。さあ、これは後輩への饒別だよ。」

「で、どうするね？契約自体はいつでもできる。しばらくこの辺で遊ばせてもらうから、適当に遊びに来たまえ。」

「そうさね、私を呼びたければこの鐘を使うと良い。特別な古人呼びの鐘だ。私にしか聞こえないだろう。啓蒙も使わない親切設計だし。」

「そして、どこにしようが、どれだけ離れていようが、ちゃんと聞こえる。すぐに駆けつけよう。」

「わかった……あなた、学園に来ないの？」

「弟子のような小柄な少年ならともかく、私のような者が行っても怪しまれるだけさ。」

「さ、いきたまえ。ぐずぐずしてる暇などないのだろう？」

「……ありがとう。あなたの強さと優しさを認める。すべて信用できるわけじゃないけど」

ふふ、狩人とはそういうものさね。

ああ、手土産を持つてくるときは果物か、帽子で頼む。帽子コレクターなんだよ。それで何度も決闘した。

「．．．．．やっぱり、少しへんな人」

よく言われるよ。良き狩りを、小さな狩人。

狩人と古い大きな物語

■
おや、こんな使い魔小屋に何の用かな？ん？なぜ私がここにいるのか？

何、そのへんの獣を狩って手土産に持って行ったら料理長とやらがここの獣の世話係の仕事を恵んでくれてね？

私がいると獣共がおとなしいそうさ。まあ、どうせ染みついた血のにおいを恐れているのだろうかね。

何、よかった？ふーん、私の食い扶持を心配してくれるのかい。ありがとうよ。

ふむ、その竜を小屋にね。いいんじゃないか？ああ、竜よそんなにおびえるな。何もとって食いはしない。

まあ座りたまえよ。暇ならしゃべろうじゃないか。

たいしたもてなしはできないが、干し肉とワインくらいはある。

どうせそろそろ馬鹿弟子が騒ぎでも起こしただろう？

ははは、やはりそうか。ふーん、小間使いをいじめる貴族を相手に素手で挑み？ぶん殴って勝った。

剣あり魔法ありで複数戦やって青銅のゴーレムをバターみたいに切り裂いた？

まあ、狩人たる者そのくらいはできるものさ。恐ろしい、人ならぬ獣を狩るのだからね。

ほうほう、その後その貴族と馬が合つてしよつちゆう鴨狩りや鹿狩りに行つたり、鍛錬試合を？

事の発端である小間使いや他の迷惑をかけた者にもきちんと謝つた？

ふーん、なかなか気さくな貴族もいるものだな。若き紳士、騎士の卵といったところか。

なかなか奴は対人関係に恵まれているらしい。若いとは素晴らしいものだな。

ん？私も若いだろうって？20そこそこ？まあ、肉体はね。魔の深淵にはいろいろあるのさ。

魔法とは、人の可能性とはそういうものさね。

ふむ、今日も賭けを？今度は一回再戦ごとエキユウの参加料を支払う？

勝てばその日の分は賭けた倍額もらう？ふむ、かまわないが……そうさね、コンティニューするならばースウにしたまえ。

たしかパン1個分くらいの価値だっただろう？ースウ。そのくらいがちょうどいいというものさね。

そのかわりあの棒は大鎌と戦斧の二種類の振り方を使い分けよう。

やはり狩人たるもの、武器の変形か、使い分けくらいはしないと、らしくない。

そういうこだわりなり美学なりが、人を人にとどめる最後のよすがなのさ。

でないとい人は簡単に堕ちる。獣なり、人でなしなり、いろいろなものにね。

『かねて血を恐れたまえ』狩人に伝わるもつとも有名な警句だ。

自らから流れ出る血ではなく、獲物の返り血に酔いすぎれば、あつというまに獣になる。

いやそもそも我々から言わせれば人も獣も大差ないのだ。どつちが表に出ているかというだけのコインの表裏にすぎん。

だから、我々は人らしさを忘れてはいけないのだ。もともと獣だからな。

君の杖もそういうものだろう？ いや、言い過ぎたかな。まあ流してくれ。

さ、腹もふくれただろう。軽く腹ごなしに運動しようか。

■

ま、こんなものだ。一日に二〇回挑む。頑張ったほうじやないかね。

一時休むことをおすすめるよ。聖歌の鐘を使つてやろう。

これはコストが重い代わりに何の代償もなく体力と毒を癒やす。心までは無理だが。

代償は多少力を使うのでひとときに二回は使えない。しばらくの休息が必要になる。

そういうものだ。

さて、傷が癒えるまで昔話でもしてあげよう。私の故郷に伝わる、もつとも古い天地開闢の話だ。

古い時代。世界は何も分かたれていなかった。

昼も夜もなく、晴れも雨もなく。ただ霧に覆われた灰色の世界に朽ちぬ古竜だけがいた。

だが、ある時「最初の火」がおこり、世界を照らした。

灰色であった世界に色がついたのだ。あたたかさをつめたさ。生と死、光と闇に。

世界に差異がもたらされたとも言おう。

幾人かがこれを果敢にも手に入れた。全く知らぬ、それまで見たこともない触れればやけどするようなものをだ。

それは間違いなく勇気であっただろう。

最初の死者ニト。イザリスの魔女。太陽の王グウイン。そして名も知らぬ小人。

彼らは竜達に挑んだ。壮絶な戦いだったそうだ。

グウインの操る雷が鱗を砕き。魔女の炎は嵐となり、ニトの死の呪いが解き放たれた。

やがて鱗のない白竜シースが人の味方となり勝負はついた。

火の時代。明るき人類の黎明がはじまったのだ。はるか昔、神代のことだ。

それが私たちの故郷では世界の始まりだと言われていたよ。

いまや知る人も少ない、古い古い昔話さ。

異端？なに、ただの昔話。おとぎ話さね……ふむ、続きか。

とても、とても長い話になる。夜が明けてしまふよ。

また次の機会にとっておきなさい。いつでも話してやろう。

一つだけ質問？いいとも。

それで彼らはどうなったのかって？それはもちろん、いつかは皆死んださ。

それまではどう歩んだかは、次の話だ。

だが、そうさね……私も少しは炎を操れる。私の遠い祖先はそれはすさまじい炎の魔法の達人だったそうだ。

これはただの願望、とりとめもない妄想だが……

きつと、彼らの火はひどく弱まってでも誰かに継いでいかれたのさ。私もひよつとしたらその末端にいるのかもしれない。

そして、いつか私の火を継ぐ者もまた現れるだろう。

狩人は血の遺志を継ぐことで強くなる。死者に敬意のあらんことを。

私も、かつて言われたものさ。狩人とは古い遺志を継ぐ者だと。遺志とは意思。

親から子へ、師から弟子へ。時には敵からすらも。

最初の火を手に入れた王達の勇氣や氣高さは、薄れて穢れながらもきつと誰かが受け継いでいくモノなのさ。

私を若いと言ったね？私がそんな若さで狩人の助言者などやって隠居してるのもそのためだ。

私もまた、親から、師から、先達からその使命と役割を継いだのさ。

人とはそういうものだろう。たとえば世界が闇に包まれようと。たとえば地が割れ天に浮かぼうとも……

人はどんな時代であつても生き延びようとあがき、続いていくものなのだ。

さ、長話になつてしまつたな。これで今夜の昔話は本当に終わりだ。

水でも飲んだら帰らたまえ。ああ、竜よかしこまるな。一時とて、ここは君の家で私はその世話係にすぎないのだから。



さて、姫君は帰つたか。なあ、幼き竜よ。君ほんとうは喋れるんだろう？

何、私の前で隠すことはない。姫君にはよく言つておくから氣にせず楽に喋り給え。

ふむ、青き血を持つ赤き月の御方？ああ、それは私の雇い主だ。私ではない。

私のことはただ狩人と呼ばば良い。

狩人様、か……まあいさ。懐かしい呼び名だ。嫌いではないよ。

ふふふ、元々の君はけっこうなおしやべりのようだな。何、私も話は嫌いではないとも。

ふむ、話が聞きたい？さてね、本筋の話は姫君にとっておくとして……
枝葉となる話でも語ろうかね。そうさね……たまねぎ兜の騎士カタリナのジークバルドと巨人の王ヨームの話などいかがかな。

本当は姫君が好みそうな英雄譚なのだがね。

狩人様と盗賊

ほう、君は……たしかタバサの友人だったかね。

そうだ、雪を暖める火の如き娘だったな。して、華麗なる炎の令嬢がこんな使い魔小屋に何用かね？

ふふふ、そうだろうとも。なに、取り繕わなくても良い。

大切な友人が悪い大人にたぶらかされそうだったから心配になったのだろう？

釘を刺しに来たか、見極めようと思ったか……まあ、どちらでも良い。

ああ、もちろん。私はあくまで彼女の助言者だ。害をなす気はない。

まあ立ってないでこちらで一杯どうかね？ 私は酒は嗜む程度だが、この地のワインはなかなかだ。

存分に見極めるが良いさ。

そうさね、駆け引きも良いが誤解があつては困るので先にぎっくり言つてしまおうか。

回りくどいのは苦手だろう？

私が彼女に協力するのは境遇が似てたからさ。私も没落貴族の出で、忌み子あつかい

だったからね。

そして彼女も私も狩人の技を生きるために学んだ。だから先達としてほっておけなかったのさ。

私のようにいろいろ手遅れになるのを見るのは心苦しいからね。

正直に言えば、彼女を救うことで少しでも心の慰めにしたかったのだ。

そうすれば、何か私も救われたような気がするだろうから。

ふふふ、そんなに哀れむな。それは君の良いところだがね。

なにしろ君の炎は戦いではなく、おそらく人を暖めることで真価を發揮するモノだからだ。

どこまでも恵まれ、光の中にいるが故に闇に堕ちた者を憐れみ、手を差し伸べる。

だがその手は届かない。彼らは闇にいて、君は光から出れないからだ。

裏切りの魔女と同じ名を持っていても、君は闇に堕ちない。

呪いの首飾りを手に入れたとしても、それは君に触れたとたん崩れ落ちるだろう。

たぐいまれなる豪運だよ。君にはあらゆる災難が避けて通る。

それでもない？ そうかな？ まあよく思い返してみたまえよ。

まあ、それはそういうものだ。だから手を差し伸べるのは辞めて、彼らの帰るべき場所になってやりたまえ。

過酷な運命にいる者は安心して傷を癒やせる場所を必要とするのだから。それが結局は彼らにとつてもつとも役立つのさ。

ま、これが私のスタンスだ。だいたい解つただろう？

完全には信用していない？ そうだろうな。まあ、よく私を見張るが良いさ。

■ おや、これはミス・ロングビル。こんな夜更けに何の用かな？

おやおや、そんなに驚かなくてもいいだろう。狩人が猟師小屋にいるのがおかしいかね？

ほう、それは……珍しいモノを持っているね。いい武器だ。

ん？ 知ってるのかつて？ ああ、なにせそれは見た目こそ妙だがただの大砲だ。最新式の。

そのこの先端の尖つた部分が砲弾でね、中に爆弾が仕込んである。良い武器だ。詳しく教えてくれ？ いいとも。

そうさね、そのの運用法は堅牢な移動砲台や城塞……こつちで言う空を飛ぶ方のフネや竜、砲亀だったか？

まああんなものに人が生身で対抗するために生まれたものさ。いかれてるだろ？ 数百マイルくらいかな、まあ距離を取つてそいつらに砲弾をブチこむ。

突き刺さった砲弾内部の爆弾が作動して木っ端みじんになる。素敵だろ。

使い方？よくは知らないがまあ解るさ。だがまあ焦ることもあるまいよ。

異国の没落貴族同士だ。遠慮することもあるまい。多少備品をちよろまかしたところどがめ立てはしないよ。

いやだってそうだろ？どうせ故郷の家族が病気だの食べ盛りの子がまだたくさんいるのだ。急に大金が入り用になることもあるだろうさ。

やれやれそれが素か。まあ、その方が好みではある。

ま、そういう事だ。口を塞ぐなど考えないことだね。暇つぶしにはなろうが、君にとっては面倒にしかならん。

私にだって見ぬ振りをするくらいの度量はある。こういうのはお互い様というもので。

そうさな、怪盗フーケ参上！とでも書いておけば万事そいつのせいになる。

君自身はあまり気にしてないだろうが、君は学園でずいぶんな信用があるからね。

あのおめでたい方々は君を疑うという発想すら出てこないだろう。

まあ、一月は騒ぐだろうがそれだけさ。かくして世は事もなし、という具合だ。

というかそんな珍品売ったら足がつくぞ。

金が入り用なら私に売るか、もつとわかりやすく換金できるものと交換しないか？

私も実は武器コレクターでね。そういうのを見ると金に糸目はつけないんだ。ふふふ、いいとも。私のコレクションをみせようか。

そうだな、銃には銃と言うことでこれなどどうだろう。エヴェリンと教会砲。

どちらも貴族好みの美しい装飾だろう？ちなみに強いぞ。

もう一声？困ったご婦人だな！まあいいさ。これなどどうかね？

クズ血晶石二〇〇個セットだ。多分。だいたい。

なかなか美しい石だろう？我が故郷の名産品だ。

ちなみにこれもなかなか面白い使い道があつてだね。武器にはめ込むとこれがまた恐ろしく強くなるのさ。

なんでって言われてもね。まあそうさね。これは古い血が固まった一種の化石だ。樹液が年を経て琥珀になるようにね。

だからかもしれないな、流れる血はその生き物の性質をある程度決めてしまうものだ。

まあ、そこまで難しく考えなくてもいい。マジックアイテムのエンチャント用に宝石をはめ込むなんてざらだろう？

これもそういうものさ。単純に装飾用の宝石としても使われていた。

さ、売るのか？売らないのかね？金が入り用なんだろ。

ふふふ、良いとも。交渉成立だ。

ああ、教会砲の使い方？いいよ、ただ見ての通りの大砲だからうるさいよ？

だから昼間にしよう。口裏合わせの意味もある。ちよつとした金儲けを考えてね。

まあ夜は長い、だが時は短い。ばれないうちにつじつま合わせしておこうじゃないか。

■

ん？なんで宝物庫に破壊の杖が戻ってたのかって？あれだけ払って手放したのかと？

いいや、あれならまだここにあるさ。何、ちよつとした魔法を使ったのさ。

実は私も使い魔がいてね。これがなかなか面白い奴らなんだ。

まあ醜い小人たちなんだが、働き者でね。武器など渡せば一晩かからずに複製してくれるのさ。

ただあいっつけこう金にがめついから、ふんだくれると思つたときは値段を上げてくるのが困りものだ。

だがまあ、払えない額は言わないからね。まあ、対価を渡せばがんばってくれる便利な奴らさ。

赤字だろって？いや、これから赤字分を取り戻すのさ。

■ やあ、おつかれのご様子だね。すごいだろ今の学園。工事の手伝いお疲れ様。戦艦が来てても多分撃ち落とせるぞ。トリスティン学園要塞といったところか。

え？ガトリングの方がよかった？あんなにたくさん壁に教会砲があるとやる気がする？

ははは、それは災難だったね。だが取引は取引だとも。

君は間違いなくもうけられたし、臨時手当も出ただろう？

私も銃や砲を売りまくれて、学園も学生の親から金が出て。

ほら、誰も損してない。ノーカウントというものだよ。

え？なんか赤いフードの魔女っぽいのが来て？鐘を鳴らしたと思ったらデカくてキモい死体のキメラが出た？

あー、あいつらか。まだ沸いて出てくるんだな。暇なときはいいんだが、立て込み中に来られると本気で殺意がわく奴らだ。

何って……何だろうな。私の故郷の先住民民族があんな格好とマジックアイテムを使うんだ。

あとはそれを真似てる奴らとか。だいたいにおいてろくでもない連中だよ。

まあ、あれは馬鹿弟子とかがなんとかしただろう。さっそくつけた砲台も大活躍だっ

たろ？

ほう？例のヴァリエールのご令嬢が背中をみせないのが貴族だと啖呵を切って？

教会砲ぶっぱなして肩を脱臼しつつも馬鹿弟子がその隙にキメラの心臓をえぐり出してなんとか撃退？

ほう……プリミルめなかなか粋なことをする。

ん？わたしも弟子みたいな動きとかできるのかって？当たり前だよ。あいつに狩人の技を教えたのは私だよ？

まああれも一人前と呼べるくらいには上達したから、戦ったら五分五分だろう。

私も現役を退いてだいぶ勘がなまったしね。だが魔力とか腕力は現役より鍛えたからごり押しできるなら私が勝つだろう。

ただ火力が上がった分大雑把になったからそこを突けばあいつが勝つき。
な？口を塞ごうなんて考えずによかっただろう？

狩人とガリアの姫君1

■
ほう？こんな夜更けにどこへ？ああ、ガリアの王城に参内か。

ふむ……王城につれていけとはいわないが、ガリアのどこか適当な所まで乗せていってくれないかい？

お礼にそうだな、ヤーナムの狩り帽子をあげよう。ちゃんと新品だとも。

なに、心配は要らない。一度行った場所ならすぐに帰れる魔法なりマジックアイテムの類いはもってるから。

君は気にせず敵を狩れば良い。苦戦するならその鐘を鳴らせばすぐに駆けつけられるとも。

■
どうだね？ああ、ありがとう。

■
ほう？どうしたね？なに幽霊がガリアに出る？

ラグドリアン湖方面から徐々にいろんな城を経由して確実に王城に近づいてきている？

ふむ、それは困ったねえ。君、ああいうの苦手だろ？私はあんなもん適当にはったおして通り抜けるが……

ほうその幽霊は狩人姿で？追いかけると急に消える？へー……

何かね？私を疑っているのかね？さあね。だとしてもちよつとしたたわいない悪戯だ。そうだと。

ああ、君に迷惑はかけないよ。心配しないでくれ。

ん？幽霊について詳しく？ああ、狩人の武器なら普通に倒せるよ。

欲しくなったかい？まあ、いずれあげよう。

■

こんばんわガリアの姫君。

ん？ここはどこかって？狩人の夢さ。そう、これは夢のようなものさね。

まあだからこそ誰も助けになど来ないんだがね。

ああ、好きなだけ逃げるが良い。ゲールマンさえ抜け出せなかつた悪夢だ。墓石は私
が封じているし、どこにも出口はないよ。人形ちゃんは安全な場所に隠してるし好きな
だけ暴れるが良いさ。

がんばって探索するが良い。

おつかれさま。出口を教えろって？まあ聴き給え何事にも順序がある。

実は私は君の従兄弟に狩りを教えている者でね。君の話聞いて君にいたく同情したのさ。

とかかフェアじゃないだろ？片方だけ強くしたら。なりたくないかいトライアングル。

ふふふ、そうさ、そうだとも。私が本気で教えればそのくらい三晩かからず教えられるさね。

ただし、そのためには一つの契約が必要だ。

ああ、もちろんリスクはある。

ざっくり言うくと死んでもいくらでも安全地帯からやり直せるが、しくじると正気を失い体も獣に成り果てる。

君の従兄弟の報告書にもいただろう？

脳をミノタウロスに移植したメイジ。まあ他にもいろいろ研究所のキメラだとか。

ああいう感じで血の誘惑に負ければあつというまに心まで獣になり、姿も獣となる。

しかし得られる利益は膨大だ。まずどんな怪我でも治るし、そもそも夢の中ならば死んでもすぐにやり直せる。

もう暗殺におびえる必要はなくなるだろう。

そしてなによりあつというまにすぐ強くなる。

一週間あればスクウエアにだって軽くなれるし、武技にいたってはそこの騎士なんか素手でたためるようになる。

どうだね？ ははは、どうせ出口はないんだろって？ まあね。

嫌なら解放するつもりだったけど、そのためにはこの夢の中で死なねばならない。ほら。悪夢でも死んだら目が覚めるものだろ？ そういうものさ。

まあその場合はちよくちよくこうして夢枕に立つことになるんだが。

ふふふ、君はただしく賢明だ。

さあ、契約だ。穢れた我が血をすすり給えよ。

ん？ その前に一つ聞かせろって？ いいとも。

ふむ、なぜ彼女と君、両方に教えるか？ 相争わせようとか趣味が悪い？

とんでもない誤解だとも！ 私にも君と君の従兄弟のような関係の者がいたのさ。

結局そいつは放蕩の挙げ句に私の恩人を傷つけたので私がケジメとして倒すしかなくなつた。

遠距離から火炎瓶だの投げナイフだの銃だの撃ちまくってね。

やる方もやられる方も名誉などないなぶり殺しさ。

後味悪かつたね・・・

まあ、あんなのは私たちだけで十分だと思つたんだ。

だから君たちにはそうなってほしくないのでお節介を焼いているのさ。

君に実力がつけば少しは自信も出て余裕も出来るだろう。

とか部屋にこもっているから鬱屈するのだ。外に出て狩りをすればそんなこといずれどうでもよくなる。

狩人とはそういうものさね……

納得したかね？そこまで言うなら絶対トライアングルにしろ？もちろん、約束しよう。

さあ、血をすすり給えよ。

よろしい。契約は完了した。

ではこの三種……いや杖はすでもつてるし、初心者向けじゃないからこの斧と鉈、好きな方を選び給え。

それから銃は単発と散弾のどちらかを。

何、どれを選んでみずれ同じものが高くない値段で買えるようにするさ。

さあ、選びたまえ。

ほう、鋸鉈に散弾銃。なかなか使いやすいのを選んだね。

では、パワーレベリングだ。この火炎放射器を貸してやるから、これから行く教室の奴らを焼いてきたまえ。

ああ、杖も返そう。魔法でも何でも使って好きなように焼けば良い。

安心してくれ、あいつらはもう人じゃないから。

今は何も解らないだろうが難しく考えることはない。君はただこの先にいるバケモノを狩れば良い。

危ないと思ったり、だいたい狩れたと思つたらこういうランプを触りここに帰りたいと願うのだ。

それも無理ならこの「狩人の確かな徴」を使い給え。これも願うだけで良い。

そうすればそこからは逃げられる。ああ、建物の外に行くなよ？外に行った先は地獄だから。

キメラの森が生ぬるく感じるバケモノの巣窟だ。じゃあまあ頑張りましたまえ。

狩人とガリアの姫君2

■ おかえり。ではまず体力を30まで上げ給えよ・・・

ん？魔法を教えてくださいませんか？神秘とかそういう数字だらって？

そうだよ。でも何事も体が資本だ。体力がなければ何も出来ん。

どうしてもというなら25までは上げなければこの先は耐えられんよ。

いずれ解る・・・

まあ、好きにすれば良いが、体力は最低30、持久は20ないと多分きついで。

あとは好きに振れば良いが・・・欲張って全て上げるのは無理だ。

上げる数字は攻撃用のものは2つまでにしたまえ。他の2つは放置するか、15くらいにとどめるのをおすすめする。

なんでかって？そりゃ当然あとになってくるほど伸びしろが減って強くなりづらくなるからさ。

まあ120くらいまでは楽に上げられるがね。

よってもっとも上げたい数字でも50までにしておきたまえ。それ以上はあまり意

味が無い。

それより先を指すならば体力も50ないと死ぬ。確実に心が折れて獣に墮ちる。だが、なんとするも君の自由さね。私は助言するだけさ。

■
ほう、思ったよりも速かったね。もうレベル40頃かな？じゃあそろそろいいか………

君、あの建物の外に出てみたまえよ。待ちかねたつて？ははは、いい返事だ。

君もなかなか狩人の素質がある。無慈悲に血に酔える。それもまた狩人の一側面さね。

いいや、褒めてるんだよ？素晴らしいじゃないか。

さああととは実践だ。これで狩りに優れるようになれば何も言うことはない。

ああそうだ。こういう赤い宝石……血石の欠片と二欠片。これを見つけたらぜひ拾いたまえよ。

光り輝くものがあればそれだ。武器を飛躍的に強化できる。素敵だろ。

ああ、君がほしがってたマジックアイテムとかも全部店頭に並べておいたよ。相応の値段はするがね。

まあ死血も血石も必要分はばらまいておいたから頑張つて見つけて欲しい。

じゃあ、グッドハンティング。

■ おかえり速かったね。え？あの白い獣人は何かって？ローランの銀獣というんだが………

まあ、獣に堕ちた人のなれの果てだ。君も私もしくじればああなる。

悪魔めって？そうだよ、だいたいあつてる。そんなものさ。

というか解つただろう？体力持久の必要性。

獣が大きく恐ろしいならば雑魚を狩り、血の遺志を集め成長したまえ。

かつて多くの狩人がそうしたものだ。

君は力が欲しくて狩人になつたんだろう？獣が恐ろしかろうと、狩るしかないの

さ………

じゃあ私はしばらく留守にするから。頑張りたまえ

■ ほほう、これは………いい面構えになつてきたな。

相当涙も血も流し尽くし、もはや枯れ果てただろう。人間性は摩耗し、しかし心折れずに戦い抜ける………

良い狩人になつたな。ほう、武器もドロップで＋7まで行つたと見える。すばらし

い、賞賛しよう。

その分だとゴキゲンに秘儀も使えるようになったようだね？

いいだろ夜空の瞳。使いやすいし見栄えも良い。

トライアングルにも目覚めざるを得なかったんじゃないかな？

いや何しろ人間、生命の危機くらい必要性と緊急性がないとそういうのには目覚めないからね。

いくら座学をしようとか稽古をしようと、こればかりは実践で身につけるしかない………

もうスクウエア？よかったじゃないか。おめでどう。

約束は守っただろう？どうだね気分は………

最悪の一言？だろうね。

では卒業試験だ。私にぶつけない不満もあろう。かかってきたまえ。

良い返事だ。狩人よ。

カインハーストの狩りを知るが良い。

……『かねて血を恐れたまえ』狩人の警句だ。

人でありたければ血に酔うのもほどほどにすることだ、という意味さね。

美学なりこだわりを持つとなお良い。では、良い目覚めを。

いやーやるねえあの子。今レベル90くらいじゃないかね？

まあ惜しいところまで行ったよ。私に第三形態まで使わせたんだから。人の身であれば十分に過ぎるだろう。

まあちよつとばかり厳しかったかもしれないが、あの子は座学より実戦で野生と獣性に目覚めた方が速かったのさ。

ああ、人形ちゃん、工房道具のコピーが完成したって使者が言ってる？それはよかった。

使者よ。さつそくその工房道具とこの血塊五〇個セット、それから適当な血晶石を見繕って姫君の部屋におくつてくれたまえ。彼女が完全に目覚める前にね。

ああ、それとこの彼女のためだけに私が作った狩り武器もね。

まあ、仕組みは単純でノコギリを仕込んだ仕込み杖っただけなんだが。

だけど教会の使い用くらいの長さにしたからリーチはものすごく優秀だぞ。

振りも杖と鋸鉞そのままだし十分すぎないかね？傾炎の血晶石もつけてあげたし。

補正も筋技神すべてBランクだし。すごくないかい？

まあ、卒業のお祝いさね・・・・・・喜んでくれると良いんだが。

さーてここからが忙しくなるぞ。ああ、楽しみだなあ。ふふふ・・・・・・

狩人と小さな狩人

ん？どうしたね小さな狩人よ。最近、お呼びがかからない？いいことじゃないか。ガリアの姫君がいきなりスクウエアになってしょつちゆう妖魔討伐にでかけるようになった？

単身でドラゴンにすら立ち向かう姿はまさに英雄と国内で評判？

いいことじゃないか。君に当たることも少なくなっただろう？誰も損してない。

当たらなくなったけど、怪しい笑い方するようになった？妙な迫力がある？

人間は成長するものだよ。今まで必要は感じていても差し迫っていなかっただけだろう。

だから機会があれば誰でもああなるのさ。単に自信がただけさね。

え？私が狩りを教えたんだらうって？そうだよ。

理由は今の結果を見れば分かるんじゃないかな。彼女に自信と実力がつけばいろいろありたい。

君に当たることなくなるだろうし、君が欲しくもない玉座は彼女のものになる。もはや謀反を疑われることもない。

ついでに面倒な任務も彼女が勝手にやってくれる。
ほらいいことづくめだ。

なんでつて、それだけさ。彼女には更正してほしかったし、君には彼女と争ってほしくなかった。

私にもああいう親類がいて、結局殺し合いになったからね。

忌まわしいものだよ、同族狩りなど……

納得したかね？ 納得したけど私も強くなりたい？

ふふふ、いいとも。気高く飢えるのもまた、狩人の素質だ。

ただし私と契約することがどういふことか教えよう。これも君の従兄弟にも言った。

私と契約すれば一夜の間を死なずに何度もやり直せる。いかなる怪我也治る。

そしてあつというまに強くなる。君の従兄弟のように。

しかし、大事なことだが……血に酔いすぎれば、いずれ身も心も獣に堕ちる。

ほら、君も見たことあるだろうさうさうの。ミノタウロスとか。

ああさうだよ、しくじったり、やり過ぎるとあなる。

故に狩人はしつこく『血を恐れたまえ』と警句を口にするのさ。

基本的に血を浴びすぎなければ獣には堕ちないからね。

まあ、従兄弟の方にもそれを言ったが、いざというときは獣になるまえに止めてやり

たまえ。

説得が無理そうだったり、もう獣になつてたら私が始末をつける。それもまた助言者の役割だ。

さ、どうするね？ 契約はいつでもできる。

私としては地道に強くなることをおすすめるよ。

え、今夜やつちやうのかい？ そうか……まあ、いいさ。

それも君の自由さね。では、契約を。

よろしい、これで契約は完了した。

ではまずは一夜に限り死なぬのだから、まずは命がけで私にかかつてきたたまえよ。

いつもの場所で本気で応じよう。

カインハーストの狩りを知るが良い。

■ 惜しかったね。私に第二形態まで使わせるのは人の身では本当にすごいことだ。

まあ、まずは一度死に、夢に入り給えよ。

■ やあ、めざめたかね？ ようこそ狩人の夢に。悪くないところだろ？

見た目は落ち着くけど、なんか血なまぐさい？ そりやそうだよ、狩人の血がしみつい

ているもの。

では君の従兄弟と同じ条件で行こう。

君、まずはこれから行く教室で深淵に堕ちた人々を狩りたまえよ。

心配せずとももう人じゃないし、今夜の君と同じく死んでも死なん。

深淵に、悪夢に囚われるというのはそういうことさね。

遠慮せず狩りたまえ。まずは体力を30、持久を20にすることをおすすめする。

それが終わったらあの教室から外に出たまえ。キメラの森が楽園に感じられる地獄だから。

それでレベル90から100になったら卒業試験をしよう。

なあにそのくらいになればもう、ただの人間では誰も止められんくらい強い。

ああ、体力30、持久20は最低限それだけ必要だということだからね？

本当は体力40から50は必要だし、持久も30ないといろいろ厳しい。

そして上げる攻撃用の数字は2つまでをおすすめする。

ただし他の必要ならば15から20くらいまでは伸ばしても良いだろう。

理由はわかるだろう？強くなれば伸びしろが少なくなるからだ。

120になったら今度は私が君に挑もう。それ以上は人の世にあつて良い強さではない。

無理矢理たたき出すからそのつもりでいたまえ。

だが、それでも私を打倒しえるのならば……好きにすると良い。それもまた狩人さね。

その時はここの全ての墓石と聖杯をアンロックしておこう。もうどこまでも強くなるが良いさ。

さあ、説明はそれで十分だろう。狩りを始め給えよ。

■ ほう、レベル100でスクウェアになったから勝負を？

やはり速いね……素養は十分だったと言うことか。

え？あの教会にいるでかいバケモノは何かって？バケモノだよ。名前をアメントーズという。

気さくにいろんな所に運んでくれるし知恵もくれる良い奴だ。

相当に強かっただろ。倒した？すごいな、その聖杯は君のものだ。

現実でも使えるようにいじっておくから暇を見て使いたまえ。

中には新たなダンジョン、狩り場がまっている。言っておくが本当に過酷だぞ。

心折れないようにな……

さて、では庭園に行こうか。勝負と行こうじゃないか。

カインハーストの狩りを知るが良い。

あ、危なかった……第三形態どころか、輸血液3本刺しガン逃げからの深淵血晶千景と彼方への呼びかけを使う羽目になるとは……！

うん、ちよつとどころじゃなく大人げなかったな。ローゲリウス師をもう責められん……

ふう……死ぬかと思った。

ああ、人形ちゃん。工房道具に素材の卒業セットを彼女の部屋に頼むよ。

それからこれだ。彼女にも専用の狩り道具がいる。

これもすごいぞ？まあ獣狩りの斧を刃を外してメイスにしただけなんだが。

ためば仕込み杖としてすぐ振りやすい。伸ばせば斧の振り方で振れるメイスだ。

だがそれだけでは面白くないので風石をつつこんで吹き飛ばしができるようにしている。

もちろん傾雷の血晶つきだ。

意外に普通？まあね、斧や杖、鋸という最初の一振りからの直系にして最終進化形のさらに先だ。

まだ手探りな感じはあるし、極限まで無駄を省いたあれらに対して蛇足ではあるんだ

が。

まああれら3つに敬意を払ってすぐ素直で使いやすい武器になつてははずだよ。まあ方向性としては姫君が古工房より、彼女が火薬庫よりだね。

え？これで向かつてこれら死ねたら死ねんじやないかつて？

そうだよ、今度こそ本当に死ぬだろうね。まあそうならないように気をつけるさ。

私にも、私自身を狩れる相手が必要だったと言うことだ。

止めてくれる人をね・・・

子爵に啓蒙を

やあ、こんにちわワルド子爵。ずいぶんと熱心に神学のしらべごとかね？

ああ、申し遅れた。私はパルフアン・ド・リユンヌ・ラ・シヤスイーズ・ド・カイン
ハースト。

山奥の没落貴族さね。

しかし君……ずいぶんと聖地に関心があると見える。

虚無や始祖に興味が？古い時代の神秘とその秘密……私も少々詳しくてね。

よければ語り合わないか？優しげな神とその愛のひけらかしについて、とか。

まあそんなに邪険にするな。君は知りたいたいんだろう、聖地になにがあるか。

母が危惧していたものとは何か……あるいは、婚約者の本当の属性、とか。

秘境の貴族だからこそ残っている古い知識もあるものさ。

ははは、なぜ知ってるかって？君が気づいたんだ。ほかの者も気づくこともあろう
さ。

私に言わせれば教職についておきながらアレに気づかないのは思考の次元が低いか、
あえて黙ってるだけだ。

ああそうだよ。彼女の使い魔、左手の師だ。

どうかね？それでも語り合う気はないかね？

よろしい。ならば語り合おうじゃないか。神々の秘密、そして超次元を。

何からがいいかな・・・そうだ、君が一番気になっている、母君の言葉、「聖地に行け」の意味から行こうか。

君の母君は研究者だったね？ならばこんな話は聞いたことはないかな。

地震というものを知っているかね？ごくたまに地面がゆらゆら揺れるあれだよ。

母君も地質に関する調査をしたことがあるはずだがね。

まあ聴き給え。地震というのはざっくり言うとな自然の流れでね。

季節ごとの嵐や海の満ち欠けと同じ、定期的に来るものなのさ。ただ、その尺度がとても長いだけだ。

おそらく君の体験したことのある地震はかすかな揺れだろう。

だが、数百年に一回くらいは嵐の海の船のように揺れることもまれにある。

そういうのはどこかに記録されてるはずだよ、多分。

ああそうだよ、母君の言っていたのはだいたいそれさ。

数千年に一度、それよりも少しばかり大きな揺れが起きるのさ。

そんなことで、つて？まあ考えてみたまえよ。

トリステインで船の上の如き揺れが起つたら果たしてどれだけの建物が無事かね？

建物そのものは魔法で強化されていても、地面が割れたり陥没すればもう使えない。財政が傾きかけのこの国が物理的に傾いたら、さあどうなるね？

ゲルマニアやガリアあたりが野心出してこないかね？少なくともロマリアはすごく法外な貸し付けをしてくるぞ？

ああ、まあ国はどこかしらに乗っ取られ、国土は荒れ果てる。

果たして母君はそれに耐えられるかね？他人に言ってもまあ信じられまいよ。

あるいは異端審問が怖かったのかもしれない。

一人で抱えねばならず、何も手を打てない。かといって何も行動しないこともできない。

まあ普通はおかしな言動に見えるだろうさ。

だから君に「聖地に行け」と言ったのさ。あそこにはエルフという自然に関わりが深い魔法を使う人々がいる。

あるいは始祖が残したなんらかの強力なマジックアイテムがあるかもしれない。

どれも空振りだったとしても、少なくとも地震による災害からは君は守られる。サハラまでは揺れは多分とどかないだろうからね。

そうだよ、それが真実のほとんど全てだ。言葉にすればすぐ簡単だっただろ？

まあ、裏付けは自分で取りたまえ。信じるも信じないも君の自由だ。ふむ、今度は婚約者の虚無について語ってみろって？ いいとも。

まあ、あれが何故虚無なのかと言えば四属性のどれでもない、しかし確かに魔法である。

そんなものはコモンか残りの一つしかあるまい。

王家の傍系だし資格は十分ある。あの両親のそれはそれは濃い血を受け継いだのだ。魔法が使えないはずはなく、使えないならばそれは力が大きすぎるだけにすぎんだ。だ。

ま、君も似たような事を考えたんじゃないかね？

なぜ目覚めないのかって？ そりゃ本人が自覚してないからだ。

知らないものを使うことはできない。道理だろ？

まあ、王家には始祖の知識があるはずだが……秘密には常に隠す者がいる。気をつけたまえよ。

そしていずれは忘れ去られるのだ。今のようにな。

まあ、一見役に立たないマジックアイテムでしか王家の家宝である、なんてのはいくつもないだろう。

だいたいどれが必要そうなものか察しがついてるんじゃないかね？

なげって？彼女の覚醒には始祖の知識が必要だ。そしてそのための物品は王家にある。

ならばヴァリエール伯が知らないのは妙だ。覚醒させる気ならとつと使っている。

ああ、彼女を国事に関わらせたくないからあえて使っていない線もあるだろう。

だが、それならばどこか不自然だ。あんな状態で学園なんて行かせはしまいさ。

ならば答えはいくつも無い。簡単だ。

覚醒のために必要なアイテムの使い方が忘れられているのだ。

故にその品は役に立たない品だと思われる。それだけだよ。

今度はクロムウエルについて？まあいいとも。

あれが本物か偽物かなんてどうでもいいよ。実際にそれなりの力と支持はあるんだから。

まあ偽物だとしたら古いマジックアイテムだろうな。古い時代のはそういうのあるだろう？

もつと手つ取り早くて簡単な方法もある。ギアスの魔法を使いまくれば良い。

あとはそれをごまかす手を考えれば良いだけさ。

いくらでも見た目を取り繕う方法なんてあるだろ？

というか私に言わせれば別段、洗脳とか裏切りに神秘はいらん。

常人はそれほど苦痛に耐性はない。一週間も拷問すれば屈するよ。

あとは丁寧に忠誠を誓わせ、傷を秘薬で直すだけだ。

信じられない？まあやり方にコツがあるんだ。

酒や薬、眠らせないことで判断力や耐性を大幅に削れる。

痛めつけ、屈した頃に組織の理念を言わせたり忠誠を誓えと良い、従えば休息を、逆らえば鞭を。

これを適度にやるだけで一月くらいでどうとでも塗り替えられる。

短くて一週間だ。その間スキルニルでも何でも代役を立てればまずばれない。

うん？それでどうすればいいのかって？辞めといた方が良いんじゃないかな。

だって考えてもみたまえ。いくら実力があつたとしても一司教にできることかな？

どこか外国の支援あるに決まってるだろ？金はどうあつても必要だ。

つまりクロムウエルも傀儡か、すくなくとも頭が上がらない人がいるのさ。

あと単純にあの軍隊は兵站が悪すぎる。凶暴な亜人とか常にたらふく食わせなきゃならん。

腹が減ったら食われるのは自分たちなのだからな。そして島国でそんなの維持するのは相当な難易度だぞ。

支援が打ち切られればそれまで、それでもがんばるならこれはもう民草から略奪する

しかない。

もつとはつきりいえば、いずれ民を亜人や竜の餌にするか、それら全てを処分して負けるか。

それしかなくなるのだ。控えめに言つて地獄絵図だよ。そんな時に異国から来た外様とかどうなると思うね？

自国の篡奪、革命まではいいだろうさ。まずうまくいく。トリステインまでは多分とれるだろう。

だがその後他国に仕掛けられればいづれ詰む。そういう所だよ。

まっ、そういうことだ……トリステインに生まれた時点でわりと詰んでる。嫌と言うほど自覚したからあんなのも魅力的に思えるんだろうがね。

現実はどこまで行つても同じと言うことさ。

だからまあ、いつそ素直に聖地巡礼をしたいと暇乞いをしてだね。

聖地や遠国で宝を持ち帰つて一攫千金なんてのも悪くはあるまいよ。
少年よ荒野を目指せつてね。

私から言えるのはそんなくらいだ。今はね。

さあ、鬱々とした話で疲れただろう。一つ野試合でもして体を動かささないかね？

気になるだろう、神の左手の力。師である私と戦ってみればさわりだけでも解るので

はないかね？

■

さてと……良い野原じゃあないかね？え？なんで練兵場でしないのかって？

君、あんなところで魔法を使って本気で大暴れしてみろ。建物ごとふつとぶぞ。

ホラかどうかはこれから確かめたまえ。

さて、決闘には賭ける者と口上が必要だな。

私からは君のそのいかした帽子が欲しい。

それが思い出の品ならば、同じデザインのものを近日中に贈ってくれ。

君が勝てば願いを実現可能な範囲でなんでも聞いてやろう。

正気かって？いやあだろうね。自信はない。

ただど帽子を賭けて命がけの決闘は私の故郷では珍しくないし、私自身よくやったとも。

条件はそれがかまわないかね？よろしい。

『君のいかした帽子を賭けて、君にわたしを殺害する機会を与えようわたしは今ここで君に決闘を申し込む』ってね

子爵は狩りを知る

■
どうかね？ただのホラ吹きじゃなかっただろ？烈風カリン並？それはうれしいね。いつかあの人も狩りたい。

いやしかし、私に武器を変形させたんだ。誇って良いよ。

そこでどうだろう。君にもこの狩人の技を伝授しようじゃないか。

どうするにせよ、これから君にもさらなる力が必要だろう？

すばらしい、即断即決だね。だがまあ聴き給え。

この契約にはあるリスクがある。簡単に言えばしくじれば正気を失い体も怪物になる。

まあそれだけ厳しいが、一晩で烈風の一回り小さいくらいには仕上げるよ。

よろしい。ならば契約の儀式として我が血をすすり給えよ……

これで契約は完了した。だが気をつけたまえ

『我ら血によって人となり、人を超え、そして人を失う。知らぬ者よ、かねて血を恐れた
まえ』

いや？脅しでもなんでもなく事実だよ？血に酔いすぎれば簡単に正気を失うからね？そういう呪いであり加護だ。

本当に気をつけ給えよ……

じゃあまあ、いったん眠るか何かして意識を失い給え。目覚めたら鍛錬開始だ。

■

おはよう。ここはどこかって？狩人の夢さ。

まあ、私の隠れ家みたいなものだよ。

君はいい大人だからもうぎつくり言うがね、君、まずは体力を30から50に上げ給えよ。

軍人なんだから解るだろう？何事も体が資本だ。鍛錬に耐えられる体作りからしなければ本当にすぐ死ぬ。

死なずとも心が折れ、やがて獣に堕ちるだろう。

細かいことはもう面倒だからこの紙に書いておいた。後でゆっくり考えたまえ。

さあこの墓石に触れ、教室にいる深淵に堕ちた連中を狩りたまえ。

そして終われば戻ってきてレベルを上げることだ。

体力30から教室の建物の外に出ることを許可する。

まあ最初はまず勝てないだろうが、獣との戦いになれたまえ。

良い狩りを子爵殿。

■ ほほう、なかなかがんばったようだね。レベル120か。正直、獣に墮ちるんじゃないかと心配だった。

■ ふむ、レイテルパラッシュを杖として契約したか。すばらしい、新しい可能性こそ人間らしさだ。

■ 左手武器枠で元々の軍杖で二刀流。それは良いものだ、狩人の技を自身の流儀に組み込むか。新しいな。

■ 「貴公はたしかに私に力を与えてくれた。しかし貴公は私を地獄に突き落としてくれた。

よって我らの名誉の章典に従い、貴公に私を殺害する機会を与えよう。

わたしは今ここで貴公に決闘を申し込む」

■ 良いとも。挑戦を受けるのも助言者の役割だが……やれやれ、今回は私が挑むつもりでいかねばね。

■ 素晴らしいじゃないか。格上と当たるのは久々だ。ふふふ、たまらぬ狩りだ。

■ よって私も容赦なし手段選ばずの全力で当たらせてもらう。

紙一重だった……！勝てたのは正直に言つて深淵血晶を持つているかどうかだけの差だった……！！

これだから軍人に狩りを教えるのは面倒なんだ。強いから。

え？なんだい人形ちゃん、なんでそれでも卒業試験で毎回戦うのかつて？

いやあ、これが前任者からの流儀だし、なにより戦わずに勝ち逃げは美しくない。あのオドン野郎いつか絶対狩る。

それは置いて、彼らにあれだけさせたのだから、私も命を賭けねばね。

それにより、狩人たるもの格上の相手は常にいて当たり前だ。でないとなら

ん。

退屈は不死者を殺す、もつといえれば心を折る一番の要因だ。故にこれは必要なのだ。

ん？ああそうだよ、悪夢の住人である私は悪夢で死んだらそれまでだよ。

上手いこと上位者の力に目覚めて生も死もない上位者状態になれるかもしれない……

まあ死ぬだろうね。

なあに、それはそれで全て長い夢の出来事ということさ……

人形ちゃんもこれで多分心配はいらんだろう。誰かが君と共にあるさ。

もちろん、私も可能な限り共にいたいとは思うけどね。

ははは、まあそういうだろうと思ったよ。それでいいのさ・
・
・
・
・

始まった時にはだいたいでに手遅れ

やあ、こんな夜明けに何事かね？

ふむ、ヴァリエールのご令嬢が使い魔のあいつと一緒にどこかに行つた？

きつと何か冒険だから助けになりたい？ははは、なるほど。

いいよ。元より君の竜なんだし、好きにすれば良いさね。

まあ、おそらくは最近キナ臭いアルピオンあたりだろうから、ラ・ロシエール方面に行けば追いつけるだろう。

ところでその杖の使い心地どうだね？悪くない？それはよかつた。

何にしろ、戦地に行くのだ。存分に狩り、殺したまえよ。

君にはあまり手を汚して欲しくないのも本当だがね。

じゃあせいぜい頑張り給え。

■

おや、久しいな。我が弟子、そしてヴァリエールのご令嬢。

招いてもいないのに我が弟子についていつて狩人の夢にこれるとは驚きだ。

さすがは尊き血、古き遺志を継ぐ者、といったところかね……

前置きはいいい？ならば本題を話したまえ。どうせアルビオンの件だろ。

なんとかしてくれて？おいおい、狩人が集団戦苦手なのは知ってるだろうに。

ふむ、そこで二つアイデアね。いいよ言ってみなさい。

城の三〇〇人全員狩人化？アホか。いやできるけど駄目だつて。

ここに三〇〇人はいれると思うのかい！？そして彼らが卒業したら墓石がさらに三〇〇

〇個増えるんだぞ!?

住む場所なくなるわ!

ふう………まあ、それを置いておいてもだ。そんな数の狩人が国の指導層に出てみる。

間違いなくアルビオンはヤーナム化するぞ？

どこもかしこも人を浚つては獣に墮として素材にして売りさばくような外道だらけ。

上位者だらけになって誰も彼も発狂するか獣に墮ちる。

城とかどこも石化した人々を壁に埋め込むのが当然。そんな地獄で良いのかい？

控えめに言つても世界の破滅になるけど。

まあ、そんなになつても多分人間は生き延びて種をつなぐだろう。

地獄は地獄で楽しくもある。だから、地獄になつても良いなら私はするけど？

赤い月、青い血の御方はどうもそれを歓迎してる様子だし。

うむ、そうさね。辞めておくのが賢明だ。

では二つめの案とは？ふむ、武器を売ってくれと。いいよ。好きなだけ彼らに渡すが良いさ。

この間のロケットランチャー？あるよ。ぜひ買いたまえ。

ははは、解っているとも手持ちが少ないんだろ？聖杯なら開けてある。

潜つてかせぎ給えよ。ああ、時間のことか。そうだな、ちょうど一夜しかない。

ああ、そうさね。我が弟子よ、君との契約はまだ生きてる。

まあいいさ。また一夜の夢を見るが良い。何度でも。

適度に進んだ様子ならそのたびに「灯り」を設置してやるからクロムウエルの首でも何でも取ってくるが良いさ。

どうしたね、ヴァリエールのご令嬢。なんでそんな意地悪言うのか？

いやあ、これは私の故郷では大分やさしいよ？

だいたいこの狩人は問答無用で刃物と銃を持って襲ってくるからね？

ほう、ならば自分も狩人に？本気かい？月の御方は満足というか多分それが目的なんだろうけど。

いやでも、大変なことになるよ？王家の血に上位者の血が入るとか……

ああ、そうか。弟子を召喚した時点でいろいろ手遅れだわ。あ……やつて

しまったな。

まあいいか！やってしまったことは仕方がないさ！

え？どうしたのかつて？なんでもないと。いずれ思い知る。

だがまあ、まずは弟子が聖杯に潜る様子を見ていたまえよ。ここに鏡があるだろうか？これを遠見の鏡をはめて弟子の様子が見えるようにした。

まずは狩人というモノがどういものなのか。上位者に関わると言うことがどういうことなのか。

よく知って決断するが良いさ。というかどうせ関わるハメになるだろうから覚悟して欲しい。

そして知るだろう。あのレベルの戦争で死ぬるといのがどれだけ幸福なのかと。

決戦前夜に明るく振る舞う意味を。

では、良い悪夢を。

■

うるさいなあ。庭で昼寝ができないじゃないか。

狩人にしろ？君はアレを見てなおそう言うのだね？

蜘蛛とかアメンドーズとかざっくりいえばナメクジ連中を見てなおアレと戦う決意があるのだね？

どっち道関わるなら自分から攻めていった方が自分らしい？背中をみせて見て見ぬ振りはない？

おまえはあんなのに従つてる卑怯者？

ああ、そうだな。どちらもその通りだ。

そして狩人になるというのはアレの血をすすると言うことだ。しくじればああいうことになる。

君だけではなく、国一つくらいは軽く沈むだろう。

それでも答えは変わらないかね？

参つたな。よろしい、いいだろう。そこまで覚悟を示されたらやらぬわけにはいかんよ。

さあ、穢れた我が血をすすり給えよ……

契約は結ばれた。さあ、騎士の元に行くが良い姫君。詳しいことは奴から聞け。

あ、そうだ。その指輪があるならぜひアルピオンにある始祖の香炉、トリステインの始祖の祈祷書を求めたまえ。

隠された知識が手に入り、それはきつと君の役に立つはずだ……

ざっくり言えば魔法が使えるようになるだろう。だがそれも根本的には狩人の血と変わらぬものと思いたまえ。

では、良い狩りを。

ヤーナムの血を受け入れるってそういうこと

あ、マチルダ。すまない、いろいろやらかしてしまった。

ちよつと王党派に弟子が肩入れしちやってね？うん、そろそろ戦争がとんでもないことになるだろう。

うんごめん。まあそういう訳でだ。君のアルピオンの身内を急いで全員保護しよう。今夜中にだ。いや解るだろ？戦争がしつちやかめつちやかになつたら残党がそのへんの村を襲うぞ。

君の身内もそんな感じの所にいるんだろ？非常に危険だ。
いやいや、狩人が関わつたらどうなるかはもうだいたい解るだろ？

この間の再誕者……あのでかいキメラゾンビだ。ああいうのが自然に沸いてくるようになるからね？

よし理解してくれたか。啓蒙上がってきたね！

そういうわけで自体は急を要する。最速で行こう。

え？種族？忌み子？狩人に今更それを言うかね？だいたい人間の形をして襲つてこ

ないならまあどうでもいいよ。

そのうち見た目とかどうでもよくなるから。狩人とはそういうものさね。

■

いやー飛ばしたな！なんとか数時間で来れた！いろいろ狩り道具使ってしまったけどね。

ここがウエストウッド村？いいところだね、禁域と比べると森という概念を覆されるな。

妹をみせるが驚くな？大丈夫だよ、驚いたくらいでは人間死にはしない。

発狂して血をふいても3割くらい生きてるものだ。

やあよろしく、君がティファニアかね？私はお姉さんの知り合いで……狩人と呼んでくれ。

しかしどこが変なのかね？すごく普通だろう。わからん……ちよつと待っててくれ。瞳のカレル装備したらわかるかもしれない。

え？胸？耳？……ちよつと待っててくれ。

んー……うーん……言われてみればたしかに無改造の人間とはちよつとだけ違うかもな……

いやしかしこれ気づくほどの違いかね？気になるの君らこういうの。

あー、まあいいさ。帽子でもかぶっていたまえ。後で整形手術くらいしてやるさ。血の医療じゃなくても普通の医療と麻酔、あとはちよつとした水メイジがいれば十分だ。

不安？うんまあ自分でも美的センスに自信はない。

だからどこからどこまで切り取ればいいのか君が書いてくれ。インクとかで。

だが技術には自信があるぞ！うんざりするほど見たからなそういうの！

さあ事情を説明したらさっさと荷物をまとめて逃げるんだ。

夜が明ける前に！でないとすぐに地獄になるぞ！

■

ふう、ふう………なんとかラ・ロシエールまで逃げ切れたか………危なかつた！

マチルダは情報収集？頑張ってくれ。ああ、それと可能ならば水の秘薬を。

やはり時間はもう少ない。宿屋で即手術だ。一〇分前から。

ティファニア嬢、君の耳を人間らしい形に切り取る。安心してくれ痛みはない。

そういう痛み止めの薬を使うからだ。傷も水の秘薬ですぐに治る。

どうするね？大丈夫？それはよかつた！

マチルダ、急いでインクで切り取り線を書いてくれ。終わったらこの薬を飲ませろ。

いや？普通の痛み止めと感覚麻痺の霧の亜種だけど？まあ大丈夫だ。血は入ってないから。

よし……手術を開始する！

■ おかえりマチルダ。どうだったね？話の前にティファニア？大丈夫だよこんな感じでよかったかね？

普通の人間の耳にしか見えない？それはよかった。私も写真画とかを見てがんばって再現したからね。

で、情勢はどうだね？情報収集してきてくれたんだろ。

ほう、まず一夜にしてオリヴァー・クロムウエル暗殺？鋸鉋で？

王党派は混乱に乗じて大砲を手に持って城から命からがら脱出。

その後貴族派の拠点に光の爆発が？隕石まで降ってきた？

あー、まあそうなるよね。うんごめん。うちの弟子がやった。

私も若干協力した。ごめん。

いやまあだからこそ責任取るために君らを逃がしているわけだが。

ほう続きが？追い詰められた貴族派は悪魔を召喚した？ほう……

身の丈五メートルくらいのトナカイと狼男を混ぜたような奴が大暴れ？

あー、聖職者の獣か。ふーむ、これは、どうも……
うむ、かなりまずい。ひよつとしたら私とは別口で上位者……まあそういう
バケモノがね？

そいつらが入り込んでるかもしれない。

ちよつと各地の知り合いに連絡取ってみるよ。それはそれとして学園に急いで全員
連れて行くんだ。

狩人様はヤーナム野郎だから

おっと、すでに遅かったようだね。学園も襲撃されてるよ。いやだって聞こえるじゃないかガドリングと大砲の音。

まあ雑兵は任せてくれ。群衆滅ぼすのとか大得意だから。

ふう、雑魚は狩ったか……残りメインの部隊だが、おや？なぜタバサ嬢とキユルケ嬢が？

ああ、内政干渉になるから王城からフネにのって逃げてた？なるほどね。

あれが最後の一人の傭兵部隊ボス？ほう、コルベール師は火薬庫の力を使いこなしているようだね。

まああつちも火薬庫狩人だけど。

よし！連金で油を撒いてからの炎エンチャントパイル！あれは完全に決まっただろ
う………

ん？あれは……まずいそれは獣化だ！避ける！

ふむ、あの傭兵隊長は旧主の番犬になったか……それもおそらく冒流仕様だな。これはなかなか敵うまい。

狩人の心得がある者は全員でかかれ。光つたら突進の前触れだ。当たれば一撃で死ぬから横に必ず回避するんだ。

「囿は私とコルベール師がする。その隙に手足をへし折れ。

「カインハーストの狩りを知るがいい」

■

いやーメチャクチャ強かったね旧主の番犬。だが皆いい動きをしてたよ。

タバサは実能的確だったし、ギーシユ少年もバカ弟子との稽古が生きたな。

それに今回の主役はコルベール師だろう。ちやつかりキュルケ嬢の心もハントしてるし。

えっ、貴族派はみんなあんなのかって？多分ね。

ここでああいうのを出してくると考えるところが本拠地はヤハグル化してるんじゃないかな。要するにみんなあんなになってるだろう。

そしてはつきりした。間違はなく別口で誰かが上位者と契約してる。

ロマリアの神官か、ジョセフ王あたりだろうな……。となるとイザベラは危ないぞ。

どうするタバサ嬢。ジョセフ王が上位者と契約してたら間違はなくイザベラと対決するだろう。

そしてその時に狩人はイザベラだけだったらずまちがいなく彼女は死ぬね。どうする？イザベラを助けるか？それとも見捨てるか？

ふふふ、そういうと思っていたさ。なに助けに行くんじゃない？

ジョセフ王を倒しにいくだけ？自分一人でたおしたら玉座が転がってくるからイザベラに手柄を譲る？

ふふ、まあそういうことでも良いさね。さあ、準備をしよう。

■

うわあ、ガリアの王宮ってこんな冒瀆的な形してた？してないよね……

いつもの如く目玉だらけだな。だから上位者に触れた奴らは嫌いなんだ！

姿形をそのまま真似るとかウイレーム師が泣くぞ。

だけど、脳にそういう器官があるのも事実だから間違いつて言い切れないのも嫌な所だしなあ……

半端に成果があるからむっちゃくちやするもんねあいつら。

え？いいよ気にしなくて。上位者の智慧に触れると皆ああなるってだけさ。

さてと……戦っている音が聞こえるな。時間が無いぞ、急ごう。

「これはこれは、ヤーナムの狩人殿。いかがかね？懐かしいだろう。

メンシス学派の教義、それは私を新たな啓蒙に導かせてくれた。

すなわち、まともであることのなんとくだらないことか！

それを真実として教えてくれたのだ。彼らの書物には感謝しても仕切れんよ」
うわあ、メンシスの檻の王冠仕様かあ……イカれたもんかぶってるなあ。

「私は征く。宇宙へ！超次元へ！そのために城をこのようにした。

風石の埋没もまさにこのためにあつたのだろう」

城ごと宇宙へ行く気かい？相変わらずヤーナム野郎だなメンシスの徒というのは。

この分だとマジで空気対策もしてそうで嫌だ。ああ嫌だ技術力のあるバカは。

「ふざけるなよクソ親父が。あんたは、あんただけは私の獲物だ。

私があんたを仕留めなきゃいけないんだ。師匠も人形も下がってな」

いやいや、難敵には複数人で当たるのもまた狩人の作法さ。

使い給え。聖女の血だ。それで回復するだろう。

なあにこのくらい良い思い出になるものだ。楽しく酔えそうな狩りだからな。

「私もあれには恨みも因縁もある。イザベラ姉様だけに背負わせない。

決着は私たちがつける。それでこそ意味がある」

それに、綺麗事言っている場合でもないだろう？

どうせ虚無とか彼方への呼びかけとかそういうの使うんだろう？

さあ囲んで狩り殺すぞ！

悪夢は巡り、そして終わらないものだろうか？

血にまみれ、倒れ伏すジョセフ。奴は強かった。

オリジナルの「呼びかけ」に時を操る虚無、月光。悪夢的だ。

「我ら王族を嘲り、罵倒した者たち。それでいて忠臣ぶる汚物共。

イザベラ、シャルロット、お前達もきつと心当たりがあるだろうか？

うんざりじゃあないか。故に余は狩り尽くした。余は余の狩りを全うした……」

全力を尽くした狩りだった。三人で挑まねばきつと負けていただろう。

しかしなるほどね。そういう個人的な復讐は嫌いじゃあない。すばらしいじゃあないか。

それとも、親心かね？ 風見鶏、宮廷雀どもを狩って悪役は全て自分が引き受けると？

まあこの大陸一の国が滅べば君らの娘はたいそう苦労するだろうか。

「狩人ならば、その激動の時代ですら、生き延びるのだろうか？

お前達はそういう人間だ。

太陽が闇に没しても、獣に街が飲まれても、鋼鉄の鬼が緑の毒をばらまいても……

きつと、生き延びる。ならば、娘らもそうなるのだろう。案じてはおらん……

ああ、だが泥に浸かりもはや見えぬ湖。宇宙よ……たどり着くことはできぬのか」
ウイレーム先生ですら見ることにしかできなかったものだ。そう簡単にたどりついてもらっても困る。

「ククク……それもそうか。」

なあ、狩人よ。そろそろ、月の魔物を殺したまえよ……駒はもうそろっているだろう？

惜しい、なあ……余もそこに入れば、なあ……フフフ、血を恐れたまえよ、狩人殿」

ああ、解っているさ。上位者の血を吸いすぎればどうなるかくらいは。

「待ちな……そいつを殺すのは、私だ！」

「いいえ、私たちが殺さなければいけない。狩人、あなたではない」

いいや、こうしたものを狩るのは助言者の役割というものさ。

君らが殺したとは公に言うが良い。

さようならだ。王様。優秀なメンシスの狩人よ。

■

「……あんたが親父を殺したのはまあいい。もう終わったことさね。

だけど、これは、この有様は何だ!？」

「月が二つとも赤い、それに空に浮かぶもう一つのヴェルサルテイル……!」

あれは、宇宙に向けてとんでいつている……」

ごめん。一杯食わされた。あれは「悪夢」だ。

死ぬことで悪夢の主になったのか。しかし、どうしたものか……

「悪夢」自体が現実から視認できてなおかつ空を飛び移動するだど？

さすがにこれは初体験だな……とりあえずあそこにいるジョセフの本体を倒せばいいのか？

「いいえ、その必要は無いわ。ただ、今は静かにジョセフ様の成されることを見ていて。

赤い月の魔物も、あの悪夢と共に宇宙へと去るはずよ。

今は、だけれど……フフフ、ああジョセフ様。今、おそばに……」

君は、ああジョセフの愛人というか神の頭脳か。どういうことだ？

待て！ああ、しまった。まさか銃で自害とはな……

「師匠、一体何が起つてるんだい？説明、してくれるんだらうね？」

ああ、今ちよつと整理しているが……ふむ……

どうやらことはもう終わっている。

あのもう一つのヴェルサルテイルはいずれ空を飛び宇宙まで到達し、そしていずこかへと消える。

そうなつたら赤い月も消える。月の魔物もいっしょに消える。

そういうことらしいが……うまくいくものかねえ。

「つまりアレを放置するのが一番？」

わからん。そうかもしれないし、いつそ狩ってしまうことも一つの手かもしれない。

本人達はこのまま消え去る気らしいが、ヤーナムの技術を使ってそう上手くいくものとも思えんし。

なによりこのまま勝ち逃げされるのもな。君らはどうしたい？

あの王は逃げる気らしいが、追ってもう一度殺すかね？

「私は……」

「あたしは狩り殺す。逃げるなら追い、隠れるなら暴く。」

その覚悟なんざ、とつくにできている。お前はどうかんだ、シャルロット
「私は倒す。それをもって復讐と狩りを終わらせる」

なら決まりだ。しかし悪夢は生半可じゃない。

この先仲間が必要だ。狩りを全うするために。

私も今宵、狩りに加わるとしよう。

私の全力をして、月の魔物とのケリをつける。

悪夢を終わらせるときだ。